松波むかし語り　ここに住み続けて　その１

遠くに富士山、遠浅な千葉の海と潮の匂い、その昔、松の木が幾重にも続いていた豊かな自然に囲まれていた松波は、いまも閑静な住宅街のたたずまいを残しています。でも、松波の昔はどうだったか、そんな中で先人たちがどう汗を流してきたのか、そうしたことをお年寄りの頭の中にだけしまわれているのはもったいない。そう考えて、長年、松波に住んでこられたお年寄りのお話を、シリーズでご紹介することにしました。
松波の歴史と生活の知恵がかいま見えるかも知れません。お楽しみに！

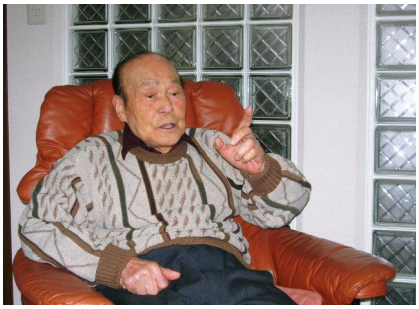
今回のお客様

食料品店「川幡商店」を経営しておられた

川幡　儀平 さん　９３歳　４丁目

昭和 19 年、ふるさとの東京・八王子から移り住む。

昔は自転車で登戸まで配達に回りました。
みなさんに育てられたようなものですよ。



「私は大正 4 年、東京の八王子に生まれ、日立航空機に勤めていた関係で千葉に移り住んだんです。軍隊は高射砲部隊で、朝鮮から中国、果てはビルマまで転戦し、幸い生きて帰り終戦は内地で迎えました。

有名な川幡商店がいまの土地、4 丁目に店開きするのは昭和 24 年のことでした。「松波はその頃、まださみしい原っぱの中に日立の住宅が並んでいるようなところで、社宅の関係でここに住むことになったんです。商売を始めてからは、炭や雑貨、米、たばこ、酒、いろいろ売ってきました。雑貨は船橋まで仕入れに行ったり、米はうちで精米して登戸あたりまで自転車で配達しました。その配達で顔を広げたことで、商売を広げてきたんです。まいなさんに育てられたようなものですよ」。

配達の自転車は、映画『三丁目の夕日』にも登場するミゼットに代わります。「道路は舗装してなかったから、よくぬかってね。それと店の前は西千葉から競輪場に行く通りだったから、競輪のある日は道路が人で埋まってました」。まだ、競輪場への無料バスが走る前の話です。　「当時のトタン屋根は瓦葺きに代わり、松波の家並みもずいぶんきれいになりました。松波公園に植えられた桜の苗木も太く立派になりましたね」。

老人大学に通ってからは、川幡さんの多趣味が一気に花開きます。「ダンスを習ってたんですが、その先生をお願いして公民館でダンスを始めたときの発起人になったりしてね」。玄関に置かれたみごとな壺もご自身が焼かれたものだし、部屋には水彩画が並びます。敬老会での川幡さんの詩吟を覚えておいでの方もおありでしょう。詩吟は免状の腕前とか。その元気のもとは、毎日欠かさない体操だとか。

昭和 24 年　川幡商店が開店